

ポエジーの誘惑

齋藤愼爾

編

大岡昇平

武田泰淳

三島由紀夫

山口雅也

夢野久作

牧野信一

塚本邦雄

澁澤龍彦

皆川博子

竹本健治

佐藤弓生

安部公房

小沼丹

倉橋由美子

中井英夫

なだいなだ

柘植光彦

出久根達郎

太宰治

現代詩
殺人事件



光文社文庫

げん だい し きつ じん じ けん
現代詩殺人事件

ポエジーの誘惑

編 者 さい とう しん じ
 齋 藤 愼 爾

2005年 9 月20日 初版 1 刷発行

発行者	篠	原	睦	子
印刷	萩	原	印	刷
製本	関	川	製	本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

© Shinji Saitō 2005

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73945-8 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

JASRAC 出0511364-501

光文社文庫

現代詩殺人事件

ポエジーの誘惑

齋藤愼爾編



光 文 社

『現代詩殺人事件』目次

I

オフィーリアの埋葬

大岡昇平

9

才子佳人

武田泰淳

31

中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃

三島由紀夫

75

『私が犯人だ』

山口雅也

89

II

髪切虫

夢野久作

127

変装綺譚

牧野信一

141

冥府燦爛

塚本邦雄

169

エピクロスの肋骨

澁澤龍彦

191

あの紫は

皆川博子

219

パセリ・セージ・ローズマリー
そしてタイム

竹本健治

247

銀河四重奏のための6つのバガテル

佐藤弓生

253

III

詩人の生涯

十二号

永遠の旅人

干からびた犯罪

海

大きな赤い太陽

いちめんのなのはな

犯人

安部公房

小沼 丹

倉橋由美子

中井英夫

なだいなだ

柘植光彦

出久根達郎

太宰 治

273

293

315

325

357

377

439

455

解説 齋藤愼爾

474

I

オフィーリアの埋葬

大岡昇平

大岡昇平●おおおかしょうへい（一九〇九―八八）

小説家。東京生まれ。四四年召集され、フィリピンに出征。後の文学活動に大きな影響をもたらし、四九年『俘虜記』、五一年『野火』などの名作に結実する。『レイテ戦記』（七一年）は、その集大成と言える戦後文学の記念碑的作品である。

ユトランド半島の荒涼たる砂丘地帯を横切つて、終日、ホレーシオと共に旅を続けた。単調でゆるやかなうねり、氷河の残した岩と碎石、その間に低い松がまばらに立つ間に馬をやつて、夜の帳とばりの下りる頃、とある谷間の村の宿で、出迎えの腹心の者らと落ち合った。彼らは私の王子の正服と佩剣を持つて来てあつた。剣は吊つたが、服はこれまで通り船乗りの粗末なぼろのままで行く。私はデンマークではまだ歓迎されざる王子なのだ。宮廷の紳士ホレーシオに引致される、身分不明の船乗りと見られる方が安全なのだ。

二人の供の者は悲しい報せを持っていた。オフィーリアが水死したという。レアティーズと共に、再び別荘に下つて、野山を歩き廻っていたが、昨日、付近の小川に落ちて溺れ死んだという。清い流れに裳をひろげ、白百合さながらに、歌を唱いながら流れを下つて行つたという。父の死を悲しんで取り乱していたから、思い余つての身投げか、過つて川にはまつたのかわからぬ、という。なんたることだ。デンマークでは、今年に入ってから、これで二

六月九日

人の死者が出たことになる。そしてみな直接間接に、私がしたことから発している。花草の茂みに縁取られた小川を越すごとに、私は水面に浮かぶオフィーリアの姿を思い浮かべた。

六月十日

昨日と同じくエルシノーアへ向って、西より東へ、半島を横切って旅を続けた。この辺へ来ると、周囲は漸く地味豊かな田園とかわる。イギリスへの船旅で、デンマークを留守にしていたひと月あまりの間に、木々は芽を吹き、花は一斉に開いてしまった。ばら、三色堇^{さんしきすみれ}、茴香^{ういきよう}、雛菊^{ひなぎく}、きんぽうげなど、色とりどりの草花が、川のほとり、林のかげを飾っている。空はコバルト、風が渡っている。五月、デンマークから船出した時、海峡に吹いていた西北風ではなく、スウェーデン、ノールウェイの方から海峡を渡って来る東風だ。息がしやすいように感じる。風だけは、昔のままに私に優しい。自然は明るくとも心は暗い。

デンマークの領土と辺境を通行するのは、久振りだが、民々の日々の労苦にみちた営みを見るのは、私には苦痛である。水夫の姿で行くので、人々はそのありのままの姿を見せてくれる。すべてはクローディアスの富国強兵策がもたらした災厄なのだ。あの王は是非とも廃させねばならぬ。レアティーズ輩にはできぬことだ。早く帰城せねばならぬ。

午近く、漸く地平にエルシノーア湾口を扼する岩山の上の、城が見えるところまで来た。とある木立に駒を繋いで、しばらく休息を取った。

若葉の繁った木立の向うで歌を唱う者がいる。

これでももとは若衆で、やった、やった。

やってよかつたと思つたが、

いまでは、ああ、これこの通り立たぬ

ええ、しよんがいな、立たぬ恋。

いつか町で聞いたはやり唄のように聞えた。歌声の方へ、足を運ぶと、そこは墓地で、新墓が掘られるらしく、若木が植えられ、低い木組みの門が立てられている。穴を掘りながら、人足が歌っていた。エルシノーアの廷臣や、ブルジョアの中でも裕福な者を葬る墓地である。私は前に幾度か父君の代理で、廷臣の埋葬に立会ったことがある。墓掘人足も顔見知りだ。しかし彼は船乗り姿の、私に気がつかぬ。

いつしか年が忍び足、

その手にぎゅっとつかまれて、

あの世へ連れて行かれた。立たぬまま、

立たぬとはいえ、色事に未練がある、このわしを。

死人を埋める穴を掘るといふのに、このように陽気でいられるのは、ふしぎといえはふしぎ、あたりまえといえはあたりまえだ。私はすでに父王、ポローニアスの亡霊に会った。人間は死にも馴れることができる。

歌をやめさせるには、話しかけるほかはない。

「それは一体だれの墓だ」

「おれの墓だ」

「え」

「げんにおれが入って掘ってるんだから、おれの墓だ」

あまりうまくない洒落だ。彼は一つの髑髏しやれこうべを抛ほうり上げた。頭蓋に縦横にひびが入り、眼はくぼみ、鼻は欠け、泥がつまっている。最後の審判のその日まで、五体揃ったまま墓の中に横たわっていなければならぬはずなのに、身分が低いばかりに、新仏の穴を掘るためにこうしてシアベルで首を切られ、穴から外へ抛り出されるとは。

私は髑髏を取り上げ、そのみじめな面相に眺め入った。いやな臭いがする。

「だれの首だ、かわいそうに」

「道化のヨーリックでさあ、むろん肉がついて息をしていた時の名ですがね」

「ヨーリック、あの宮廷の道化、私をよく木の仔馬に乗せて、あそばせてくれた。それもこ

うなつてはおしまいだな。魂はどこかほかにいよう。しかしその抜殻がこの有様では、極楽にいようと、地獄に堕ちようと、同じことだな」

墓掘りは歌い出した。

王様が王冠クラウンをなくしたら、

道化クラウンになんなさった。世も末だよ。

王様が、王冠クラウンをなくした。

天地がひっくり返った。王様はおかわいそうに、
道化クラウンになりなさった。

「墓掘り、どこでそんな歌をおぼえた」

「おとしイギリスから来た劇団がやった芝居でさあ」

私はホレーシオを顧みていった。

「幸先きよいではないか、ホレーシオ。クロードィアスが王冠を失う日は遠くはあるまい」

「御意」

私は墓掘りにいった。

「洒落はもう沢山だが、ところでこの墓は誰の墓だ。男か女か。男にしては少し小さいよう